

平成 22 年度知床世界自然遺産地域生態系調査報告会

総合討論要点

総合討論座長

梶 光一 エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ座長、
桜井泰憲 海域ワーキンググループ座長

則久次長（環境省）より、総合討論に向けた話題提供（パワーポイント使用）

科学委員会の体制の変更について

- ・ エゾシカワーキンググループ（以下、WG）がエゾシカ・陸上生態系 WG となり、数名の委員が新たに加わった。
- ・ 適正利用・エコツーリズム WG が新設された。
- ・ エゾシカ・陸上生態系 WG と適正利用・エコツーリズム WG 合同で、ヒグマ保護管理方針検討会が立ちあがった。
- ・ 適正利用・エコツーリズム WG と適正利用・エコツーリズム部会の合同開催により、知床世界自然遺産地域 適正利用・エコツーリズム検討会議が立ち上がった。専門家と地域団体が一同に会して議論を行っている。

知床世界自然遺産地域生態系調査報告会について

- ・ 平成 20 年度からは自然科学系の調査だけではなく、社会科学系の調査が加わった。
- ・ 大泰司科学委員会委員長からは、将来的に「知床学会」へという提案もある。
- ・ 今年度までの報告会は全て札幌開催であったため、今後は地域への成果還元が課題であり、地元との連携・協働が必要である。
- ・ 札幌開催と地元開催を交互に実施することも一つのアイデアである。
- ・ 昨年までの 5 年間は環境省の一括計上予算で開催したが、今年度は何とか予算を確保して開催しており、持続的な運営が課題となっている。
- ・ 地元のガイド等が関心を持っており、科学委員会の見学そのものをツーリズムや視察の対象にできるのではないかと意見もある。

意見等 （調査報告会の今後のあり方等）

- 地元への成果還元は重要である。知床では比較的データ公開がなされている。調査地へ入る

研究者が地元へうまく溶け込むためにも、成果を還元していくことが重要となる。知床だけの問題ではなく、他の調査地でも同じテーマを抱えている。規模を現状よりも小さくし、毎年全ての研究者が集まらなくてもよい。また別に各研究者が個別に還元してくということも重要である（横国大 松田教授）。

- マネージメント・ゴールは何か。今日の発表には、モニタリングに係わるものが多かったが、それらを分析してフィードバックする仕組みがあるのかが課題ではないかと感じた（海洋大 加藤教授）。

- エゾシカについてのマネージメント・ゴールは、ゴールの達成度を評価する指標開発をしようとしており、整理しているという段階である。海域についても指標を定めて評価しようとしている。本報告会は、遺産地域での様々な情報を共有しようとする場でもある（梶座長）。

- モニタリングの結果を評価する場合は科学委員会ということか（海洋大 加藤教授）。

- 科学委員会の下にはワーキンググループ等があり、それぞれで IUCN からの勧告等の対応について検討し、それを科学委員会で議論するという形になっている（梶座長）。

- モニタリング結果から異変が感知されたら、科学委員会から行政機関へ勧告して対応させる仕組みがあるのか（海洋大 加藤教授）。

- それが科学委員会の役割の一つである（梶座長）。

- 科学委員会は、年 2 回開催されており、うち 1 回は地元で開催している。この地元開催の場を利用して成果の還元を行うことについて検討したい（環境省 則久）。

- 地域への成果還元は、重要であり、科学委員会や海域 WG 開催時などをうまく利用して、なるべく予算を使わない形で継続してほしい。予算がないと研究者も離れていくということが起こっては困るので、行政側も何とか予算確保へ向けて動いてほしい。また、知床方式の水産資源管理が全国の政策決定者の間でのモデルケースの 1 つになっており、地域経済活性化のためにも省庁を超えて地域の取り組みを支えてほしい（桜井座長）。

- 地元では、世界自然遺産への無関心が広がっており、危機感を感じている。先日の遺産に係わる地元説明会にも地元住民の参加者が大変少なかった。例えば、調査のために現地入りした研究者に結果を報告していただけるような場について地元としても工夫したい（知床財団 増田）。

- 地元の人たちも実は現場をあまり見ていない。研究者が、地元の代表者とともに遺産地域の
中へ足を運んで、現場を見た上で議論するというのも一案である（知床財団 山中）。
- 地元の小中学校へも知床の素晴らしさを伝えていくようなプログラムを検討してはどうか。
知床マイスター検定なども一つの案である（桜井座長）。
- 斜里町の既存の枠組みとして今考えられるのは、町内の中学校 1 年生を対象に観光船で知床
の自然を体験する機会がある。その他、高校生の総合学習や生きがい大学や知床博物館が開
催している講演会なども挙げられる（知床博 村上学芸員）。
- 報告会の事前 PR が少ない。また、地元で開催するのであれば、対象とする参加者層によっ
て PR のやり方も変わる。例えば、漁業者を対象とするのであれば漁協を通してはどうか（道
環研 玉田研究員）。
- 羅臼町では、平成 19 年から中高一貫教育で「知床概論」という授業を実施しており、知床
財団のヒグマ学習などもその中でやっているが、例えばその授業で科学委員会の委員に話を
していただければ、学生のよい勉強になる（羅臼町 遠嶋主事）。
- ユネスコ MAB 計画を担当しているのは文科省であり、持続可能教育（ESD）やユネスコスク
ールという仕組みもあるので、活用できるのではないかと（横国大 松田教授）。
- 教育に関する枠組みはあるので、地元からも活用することを検討してほしい（桜井座長）。
- エゾシカに関する取り組みは、長期戦になる。コミュニティーベースの取り組みが必要であ
る。地元とのリンクの順番はどうするか。地域の人々と仕組みの立案を考えてもらっていく
必要があるのではないかと（梶座長）。
- 中長期的な取り組みについては地元との連携が必要である。例えば、知床岬のエゾシカ捕獲
では地元猟友会と密な係わりを持って実施したが、その中でエゾシカ管理の意味を理解して
もらうことができた。地元へは、なぜ管理が必要であるのかを伝える努力や仕組みが必要で
ある（増田）。

- 普及啓発に危機感を持っている。遺産地域で起こっている問題を知ってもらい、次に合意形成が必要である。そのためにも普及啓発は必要である。白神山地では、ブナ林のモニタリングを環境省事業の終了後に研究者と地元ボランティアで継続しており、このような取り組みも参考となる（環境省 三宅）。
- 合意形成は特に重要であるが、皆が納得することはない。全員が合意しない場合には、折り合いを付けることが重要となる。ボランティアのマネジメントには労力がかかる（梶座長）。
- ボランティアは、しっかりとしたコーディネーターがいなければ、作業の範囲は限られる。例えば学生を含めた大学と地元との関係を強化すれば、効果的・持続的な取り組みが可能となるかもしれない（知床財団 増田）
- 生物や生態系だけではなく、利用者と地域住民が何を求めている、何を考えているといった人間側のことについて管理者がきちんと把握できていないのではないかと感じている。適正利用・エコツーリズム検討会議では、知床全体で利用動向やニーズを調べるべきというマーケティング的な調査を敷田教授から提案されており、是非実施したい。管理者側が人間に関する様々な情報を持たないままに保護管理や普及啓発を実施することには限界があるのでないかと感じている。遺産地域の管理者や科学者と地域住民とのコミュニケーションのあり方をきちんと考えずに、伝える努力だけでも効果が少ないのではないかと感じており、意見をいただきたい（環境省 則久）
- 適正利用・エコツーリズム WG 第 1 回会合の直後に、メンバーである地元の観光関係者（複数）から、規制に向けた動きと受け止めており、危機感・警戒感をもっている、という意味のことを言われた。決してそういう趣旨の WG ではないと伝え、数回の検討や起草部会会合を経た今、そうした危惧は取り除かれていると思うが、並行して、やってよいのかいけないのか、法律上でグレーな部分が多過ぎるという意見も頻繁に聞かれる（例えば、知床岬先端部への立ち入りや観光関係者による鳥類への餌やりなど）。これらグレーなものについて、どの程度の範囲であればよいのか、非難や批判を浴びず、工夫次第で容認できる形が実現可能であるなら、行政や研究者が示していくような仕組みも検討できるとよいと思う。規制のための科学委員会や WG 等というイメージを払拭するとともに、地元のための科学委員会・WG 等であることを、地元に対し積極的かつ具体的に、また早い時期に、伝えるべきである（知

床財団（新藤）。

- 地元との乖離は危険である。地元へ伝えることは重要である。ケイマフリの保全と観光船業者の海域利用に係わる議論では、漁業者、観光船業者、研究者、行政が膝づめで議論をした結果、議論がかみ合ってきている。今後、人気がさらに高まるであろう羅臼の海域観光利用についても、早い段階でそのような議論の場を作り、ルールを作る必要がある（桜井座長）。

講評 知床世界自然遺産地域科学委員会 大泰司委員長

- 知床 5 周年記念シンポジウム（横浜）の報告書が完成し、環境省のウェブサイトに公開された。この中では、村田斜里町長と脇羅臼町長からの話についても掲載されており、遺産登録当時、何よりも縦割り行政であることに苦労したということであった。10 周年の時には一元管理になってほしいという意見があった。渡辺綱男審議官は真剣に検討すると発言されていたので、この場で強調したい。
- 本の紹介だが、知床ライブラリー「知床の自然保護」が出版された。また、「エゾシカの保全と管理」は売り切れたため、増刷した。さらに、「エゾシカは森の幸」も出版され、エゾシカ管理の総集編となっている。
- 5 月 14-15 日にオホーツク生態系保全日露協力シンポジウムが北大で開催される。今後の当地域の生態系保全の方向性について本に纏めたい。
- ロシア極東のシホテアリン世界自然遺産は、知床が欠く構成要素を持っている、知床を理解するための手本となるような地域であり、今後の交流等について検討していきたい。

閉会挨拶 環境省 則久

どういう形であれ、こういう機会は続けていきたい。また、来年度は規模は小さくても知床の現地で開催したい。釧路自然環境事務所に着任して以来、主に 1 年目は遺産地域管理計画の策定、2 年目は知床五湖の利用コントロールの合意形成を中心に係わった。最近、保護地域のガバナンス（統治）として考えた場合、知床のガバナンスを地域社会として承認する仕組みが必要となっているのではないかと考えている。以前、ガバナンスの専門家も科学委員会に加わる必要があると敷田先生から提案

があった。科学委員会は行政に対する科学的な助言を行う場であるが、地域との合意形成の場である地域連絡会議については十分に機能していないとの批判もある。遺産地域の一元管理を求める声もあるが、遺産地域としての保護管理を地域社会が受容・承認するシステムの構築が必要になってきていると思われる。

明日は科学委員会が開催される。ご興味のある方は是非参加してほしい。今日はお忙しい中、ご参加いただき感謝する。